

G.W.F.ヘーゲル 論理学講義 ベルリン大学1831年

カール・ヘーゲル 筆記

Karl Hegel

ウド・ラーマイル 編

Udo Rameil

牧野広義・上田 浩・伊藤信也 訳

Makino Hiroyoshi, Ueda Hiroshi & Ito Shinya



VORLESUNGEN
ÜBER DIE LOGIK

G.W.F.ヘーゲル 論理学講義 ベルリン大学1831年

カール・ヘーゲル 筆記

Karl Hegel

ウド・ラーマイル 編
Udo Rameil

牧野広義・上田 浩・伊藤信也 訳
Makino Hiroyoshi, Ueda Hiroshi & Ito Shinya



VORLESUNGEN
ÜBER DIE LOGIK

文理閣

G.W.F.ヘーゲル
論理学講義
ベルリン大学1831年

2010年11月25日 第1刷発行

カール・ヘーゲル筆記
ウド・ラーマイル編

訳者 牧野広義・上田浩・伊藤信也

発行者 黒川美富子

発行所 図書出版 文理閣

京都市下京区七条河原町西南角〒600-8146
TEL (075)351-7553 FAX (075)351-7560
<http://www.bunrikaku.com>

印刷所 亜細亜印刷株式会社
ISBN978-4-89259-616-2

凡例

一、本書は、Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte Band 10, Vorlesungen über die Logik, Berlin 1831, nachgeschrieben von Karl Hegel*, Herausgegeben von Udo Rameil unter Mitarbeit von Hans-Christian Lucas, Felix Meiner Verlag, Hamburg 2001 の全訳である。本書は編者による「序文」、講義録の本文、および「付録」からなる。本文の欄外に付けられたテキスト校訂の記録は省略する。また「付録」は本講義録の成立や本文の理解に直接役立つと思われるものだけを翻訳した。

二、本文はいくつかの文がコンマでつながっている場合が多いが、訳者の判断で句点で切って訳した。コロンやセミコロなども訳者の判断でその意味をとった。

三、本文中の隔字体は、基本的なカテゴリーを示すものはゴチックで表記し、強調を示すものは傍点を付けた。

四、本文中のパラグラフ (§) の区分は、その多くが筆記者（カール・ヘーゲル）が講義の後に「エンチュクロペディ」第一部「論理学」（「小論理学」）のパラグラフを講義録に付けたものであるが、その他に編者が補ったもの、訳者が補ったものもある。山形括弧「〜」内のは筆記者によるものであり、角括弧「」内のは編者による補足であり、亀甲括弧「」内のは訳者による補足である。

五、本文中の段落は原則として原文どおりである（編者が加えたものもあるが、それを本書では特に明示しない）。訳者が付けた段落はその初めに*を付けて示した。

六、本文の「論理学への序論」の中の（「」内の小見出しはすべて訳者が付けたものである。

七、丸括弧（ ） は原則として原文どおりであるが、原語を示すなどのためにも（ ） を用いた。角括弧「」は原文どおり編者の補足を示す。亀甲括弧「」は訳者の補足を示す。原文の引用符はカギ括弧「」で示した。また命題などを分かりやすくするために訳者が「」で示したものもある。

八、編者の序文は解説的な内容なので、本文の後に「編者解説（編者序文）」として置いた。

九、編者序文中のイタリックは、書名は『』で示し、強調を示すものは傍点を付けた。

十、原書のページを欄外上部に、本文は算用数字で、編者解説（編者序文）はローマ数字で記す。

十一、付録の「テキストの構成について」では、編者による校訂に関わることや、ドイツ語表記の問題などは省略した。

また編者による「注釈」では、ヘーゲルが参照した文献やヘーゲルの他の著作から多くの引用が行われている。しかし本書では引用文はすべて省略した。そして「編者注」として（１）、（２）…という番号を付けて、本文の理解に必要と思われる文献の指示などに限って取り上げた。

十二、「編者注」の中で、訳者による補足を（＊）で示した。また「訳者注」を＊１、＊２…という番号で示し、主に原文テキストの読み方にかかわって編者の補足とは異なるものなどを示した。

目次

凡例

論理学講義

一八三二年 夏学期 ベルリン大学

論理学への序論

A 客観性に対する思想の第一の態度 形而上学

B 客観性に対する思想の第二の態度

I 経験論 36

II 批判哲学 41

C 客観性に対する思想の第三の態度

論理学のより詳しい概念と区分

第一部 有

A 質

第二部 本質

C	現象性	176
B	現象	168
c	物	164
b	現存在	163
γ	根拠	160
β	区別	
	仮象の第二の規定	154
α	同一性	152
a	本質の仮象	152
A	現存在の根拠としての本質	151
C	限度	146
B	量	139
c	向自有	136
b	定有	115
a	有	104

第三部 概念

目次

訳者注	261	編者注	252
		A 主観的概念	197
		1 概念そのもの	198
		2 判断	201
		3 推理	211
		α 質的推理	213
		β 反省の推理	217
		γ 必然性の推理	218
		B 客観	220
		C 理念	230
		a 生命	232
		b 認識	237
		1 認識そのもの	239
		2 意志	244
		c 絶対的理念	246

編者解説（編者序文） 263

I 講義と『エンチュクロペディ』との相互関係 263

II 一八四〇年の『著作集』版におけるヘーゲルの論理学講義からの「補遺」 267

III 一八三一年の論理学講義における「予備概念」 273

IV 一八三一年の論理学講義の「有論」と一八三二年の『大論理学』第二版「有論」との関係 281

V 一八三一年の論理学講義における「本質論」

VI 一八三一年の論理学講義における「概念論」 290

VII 筆記録の作成者 カール・ヘーゲル 294

VIII ジゲスマント・シユテルンの筆記録 299

テキストの構成について 311

1 草稿の筆記 311

2 テキストの編成について 314

訳者あとがき 316

人名索引 327

G・W・F・ヘーゲル

論理学講義

(『哲学的諸学のエンチクロペディ要綱』による)

一八三一年 夏学期 ベルリン大学

F・W・C・ヘーゲルによる筆記

論理学への序論

〈§ 19〉「論理学の対象としての思考」　まず最初に私たちの対象についての一般的な予備概念を述べます。ここでは客観一般に対する思考のさまざまな態度が考察されます。――

私たちの学問は思考を、すなわち純粹な理念を対象とします。思考は理念や思想がその真理において現れる地盤 (Boden) です。さて、各々の学問には対象があります。論理学の対象について言えば、「それはさしあたり」他の学問の対象と同様です。植物学が植物をその対象とするように、等々です。「しかし」論理学の対象はより高度なものであり、思考は空間と時間より高度なもの「です」。その思考によって、人間は動物から区別されます。思考はそれだけに植物的な自然よりも、大地の上の天空よりもはるかに高度です。思考は他の対象と並ぶ対象ではありません。(§ 20) 思考は精神的な活動である感覚、意志などと並んであるのではなく、思考はあまねく存在し、すべてを包括するものです。思考はもちろん困難な対象です。それ「論理学」は、植物学や物理学や鉱物学のように直観とかかわりあうものではありません。味わうこと、感じることは感性的なふるまいです。思考は感性的な対象を超えています。思考するにあたっては、見ることや聞くことを終えていなければなりません。

(4)

ん。見ることや聞くことは確固とした支えにはなりません。私たちがよく知っている日常的な表象も支えにはなりません。私たちが思考の純粹な基盤 (Element) を考察する場合、これらすべてを度外視しなければなりません。幾何学は空間の中にある対象を考察しますが、それは空間それ自身ではなく、空間的なものを考察します。それでももちろん人々は空間そのものを目前にしますが、しかし空間そのものはなお感性的なものです。古代の人は、幾何学は哲学への導入であると言いました。⁽¹⁾ なぜなら、幾何学は感覚とはかわらず、利害や好みともかわらず、それは死んだ抽象物だからです。そのような単純なものをしっかりと保持するために、人々は幾何学において精神を訓練します。論理学の対象はさらにいっそう抽象的であり、それは困難なものと言われます。人々はこのような純粹な空間の中で思考を働かせることに慣れていないので、次のことへの方向をしっかりと保持する習慣を身につけなければなりません。それはあらゆる感覚を取り除くという否定の努力です。気まぐれを取り除くこと、それが努力です。その限りで、論理学の対象は純粹な対象であり、次のような点で困難な対象です。すなわち、あたかも日常的な意識の地盤が私たちから消滅してしまっているかのように、私たちにはどんなより所もありません。私たちにとって慣れていないことが困難になるのであって、その困難は習慣を通して容易になります。――

〔論理学の起源〕

次は歴史的な事柄です。すなわち、論理学がどのような起源をもっているかということですが、「ここで問題としているのは」論理学とそれと結びついた形而上学です（両学問は合致します）。論理学の起源はその他の諸学問の起源と異なるものではありません。すなわち、感覚から取り出された諸規定ではなく、思考する主体に属する諸規定が学問的な意識の中に登場しました。私たちは、「そのバラは赤色である (Die Rose ist rot)」というような最も単純な感性的な判断を行うとき、私たちの意識の前にあるのはまったく感性的なものです。「である」というのは、すでにそれとは別の種類のものです。「である」というのはなんら感性的なものでは

(5)

なく、すでにそれとは別のものです。さらに「バラ」と「赤色」とはここで私たちの前で一つのものとしてあります、しかし私が区別し、分けているのです。現前しているものは単純なものです。それに対して私が区別します（したがって判断すること (urteilen) は——区分すること (Teilen) です）。この判断は私に、すなわち「それを」そのように把握するものに、属します。さらに私が「赤色」と言う場合、それは血液やその他の対象にも属する普遍的な特質を表現します。私の前にあるものはただ個別的な赤ですが、しかしこの規定されたものは普遍性の形式をもち、これもまた私に属します。人々は色というものを示すことができるのではなく、ある個別的な色を示すことができるだけです。このことは私が動物というものを示すことができるのではなく、この犬やこの象を示すことができるだけなのと同様です。象や犬は普遍的に現存在するわけではありません。このような類もまた、私に属するある普遍的なものです。私が原因と結果について述べる場合、「たとえば」家が洪水によって倒壊させられたと言う場合、私が感性的に見ているものは、洪水とそれに伴う家の倒壊です。しかし、一方が原因であり、他方が結果であるということとは感性的なものではなくて、私が行う規定です。ただ時間だけには感性的なものです。——観察することによって、感性的な対象において、その中に織り込まれている感性的ではない疎遠な形式が現れることになりました。このような形式は植物や動物についてと同様に十分に記録されてきました。次にそれらはまたそれ自身として記録されました。そしてこれらの諸形式の完全な一覧表、これが全体として形而上学と結びついた論理学 (die Logik mit der Metaphysik) です。ずっと後になってこのような諸形式が考察されることになりました。感性的なものは私たちをいっそう引き付けました。なぜなら、私たちの外にあるものをわがものとし、対象の内容を作り上げようとする理性の衝動があるからです。人間ははじめは貧しく、世界の内容で自分を豊かにします。人間の衝動は人間が世界と同様に豊かになろうとすることです。私たちは白紙であると言ったとしても、私たちは多くのものに現象しているものの内容をもっています。知の衝動が私

たちに外面的な対象をわがものにさせるのです。私たちは思考であり、私は思考するものです。思考は本能的にすべての対象へと広がりますが、しかしそのさい私たちはまだそのことを意識していません。その意識はまだ私たちの客観ではありません。逆に感性的な対象のもとにあるので、その対象が私たちにまず客観的に現象し、私たちはその対象を主観的に獲得するのです。「そのバラは赤色である」という命題の中に私たちは普遍性の形式を本能的にもち込んでいます。私たちはここではまだこの普遍性について知りません。この普遍性ははじめには私の意識の中にはなく、私にとってまだ対象ではありません。私たち自身が思考であり、私たちは思考を対象化しなければなりません。私たちが感性的対象を私たちの中に引き入れるのと同様に、私たちは思考の中心へと引き出さなければなりません。この努力は、すでにそれ自身が対象であるような内容の観察よりもずっと困難です。このような思考形式が、とりわけ概念の論理学の思考形式が、観察され、記録されました。主観的論理学に属する論理形式は、すでにアリストテレスが記録しました。その論理学は完成されており、全体として本質的な追加はされなかったと見なされました。⁽²⁾ またその本質的な基礎はアリストテレスによるものであり、これが通常の論理学として普及しています。しかしそれは軽蔑されました。このことは一方では正当なことです、しかし他方では不当なことです。アリストテレスは観察から出発し、全宇宙を彼の精神に提示させ、普遍的な自然の諸原理を通覧し、植物と動物とを観察しました。つまり動物の生理学、すなわち動物の動き、目覚めと眠りに関して、また同様に人間の精神に関して、感覚、視覚、聴覚、記憶、想像、国家および意志の本性に関して観察しました。アリストテレスはそこで観察しながら著作をつくり、観察したものすべてを思弁的に論じました。アリストテレスは経験を基礎にしましたが、しかし次には思考の概念へと移りました。彼は思考の諸形式をまたそのように観察し、それを記録しました。しかし彼はそれ以上には進まず、そのさい理性的な思考の諸形式へ、つまり概念そのものへと達しませんでした。アリストテレスの諸形式はむしろ悟性の諸形式です。アリストテレス

(7)

は、自分の考察と思想において理性的な諸形式に向かつて前進することはありませんでした。そこから彼はいかなる思弁的な概念も産み出すことができなかったのでしょうか。

〔思考諸形式の連関〕

* 以上のような悟性の諸形式を人々は熟知しなければなりません。それらは思考の諸形式であり、抽象的な諸形式であつて、一面的な法則です。真の思考に役立つためには、思考諸形式をそのように個別的に取り扱つてはなりません。そのようなことをすると、それは真ではないものの諸形式であり、有限な形式にすぎなくなります。それは具体的な真理のかたわらにあるにすぎず、それゆえ一面的です。それはその一面性から救い出され、関連づけられなければなりません。論理学はこの一面性のために輕蔑されてきました。そして当然のことですが、たとえば同一性の形式は、それ自身としては空虚な抽象ですが、しかし連関の中ではきわめて重要であり、本質的です。たとえば、「すべてのものは自分と同一である」ないし「 $A=A$ 」、あるいは否定的に矛盾律として表現され、「なにもものも自分と矛盾することはできない」と言われます。これは思考の根本法則です。私たちはこれを個別的なものに直接に應用して、「植物は植物である。動物は動物である」と言うならば、それはまったく一面的な規定であり、抽象的であり、その同一性は形式的なものになってしまいます。同一性の中には区別も存在するはずで、「すべての有限な物は消滅する」と言われます。有限な物の本質は存在しなくなることです。このような否定的なものが有限な物の本性です。「有限な物は存在する」と言われます。この命題はすでに矛盾を含んでいます。なぜなら、「存在しなくなるものが」「存在する」と言われるからです。有限な物は矛盾するものです。したがつて、「なにもものも矛盾するものは存在しない」は、悪しき (schlecht) 命題です。すべての不合理な行為は自己矛盾するものです。劣悪な (schlecht) 国家は没落します。なぜなら、それらは矛盾するものだからです。「神は矛盾である」と言うことができます。なぜなら神は否定だからです。私は欲求の感情をもっています。それは否定です。存在しないという感情が衝動であり、欲求です。すべての活動

は、欲求から生じます。神においても活動があります。——活動はある変化を定立します。すなわち、自分の中に有力な他者を定立します。すべての活動の中には区別があると同時に同一性があります。なぜなら私は私と同一だからです。すべての意識の中にこのような区別があります。なぜなら私は他のものについて意識しているながら、そのさいなお私と同一だからです。すべてのものの中に同一性と区別があり、したがって矛盾があります。そこで「すべてのものは同一である」と言うことができるのと同様に、「すべてのものは矛盾である」と言うことができます。しかし精神は矛盾に耐えることができます。自然の事物は矛盾の中で没落します。それは自然の事物においては別のものが発展するからです。天上においても、地上においても、精神の中でも、そして自然の「中でも」、なにもものも抽象的に同一ではないことが示されます。他の例として次のような推理があります。^{*1}すなわち、「すべての人間は死ぬ。ガイウスは人間である。したがってガイウスは死ぬ」。この推理は正しいと認められますが、これは次のような欠陥を含んでいます。すなわち、「すべての人間」は「すべての個別的なもの」を意味し、「すべての人間は死ぬ」は経験命題であるとされます。「すべての金属は電導体である」もそうです。「すべての人間」や「すべての金属」はすべての個別的なものについての経験を前提しています。したがって私は、すべての人間は死ぬと明言できるためには、すでにガイウスについてそのことを知っていなければなりません。——

〔諸形式の学問としての論理学〕 論理学は、諸形式のみを考察します。その諸形式が真であるかどうかは内容によります。形式は内容を規定します。なぜなら理念はすべてのものについての真の本質だからです。絶対的な形式である概念や理念は真の内容です。もしも諸形式が形式的なものとして示され、内容においては真ではないと示されるならば、それは一面的な諸形式です。同一律にはそのような欠陥があります。それゆえに論理学は学知知として輕蔑されます。そのような不都合なカテゴリーは具体的な思考や生命の中には登場しません。それら